

台風休診

九月十七日朝六時半、目覚めてすぐ枕元のテレビを点けると、台風はまだ八丈島南東あたりであって今日正午ごろ関東地方に一番接近すると繰り返している。昨夜寝る前に聞いた予報と殆ど違わない。北上する速度が落ちたらしい。この台風は戦後（ということはこの五十年來ということか）最大かつ最強だったので昨日から気になっている。

神戸の外の気配では強い雨音はしているが風はまだ強くはないようだ。時折樹木がどつと煽られる気配があつて普段とは違うけれど、これなら大したことは無いじゃないかという気がする。しかし、これから次第に荒れ始めて正午ごろに中心がやってくるとなると、今日の医院は開店休業だろうナ。

戸塚からバスと横須賀線を乗り継いで出勤して来る受付のカガミ君に電話する。台風だから今日は休んでいいよという、全く予期してなかったらしく、電車もバスも動いていませんし、大したことはないみたいですから、と渋る。責任感の強いのに感服するし嬉しいけれど、この激しい雨の中を頑張つて出勤してくれても患者は多分ゼロだろうし、それに予報が当たれば帰りは暴風雨の中を車で送り届けなくちゃならなくなるは必定で、それじゃあこっちが大変になるし、やっぱりこの状況はハタチになつたばかりのお嬢さんには無理だよ、と懸命に説得する。やっと「それでは私からヤタバさんに電話してお願いしておきますので悪いですけど休ませて頂きます」というから、そうして貰うことにしてやっと安堵した。彼女の先輩のヤタバさんは自転車で十分ぐらいの所に住んでいる。降ろうが照ろうが白髪を振り乱して自転車を踏んで来る。この人も台風だから休めといったところで素直に休む人ではない。いまだきあまり見かけない素晴らしくおおきなゴムの長靴を履いて、必ずやつて来る。これぐらいの暴風雨では絶対に休む人でないから無駄な電話はしない。

もう一人、藤沢から日曜日だけ来て貰っている看護婦のビゼンさんは名前を知らないがジープみたいな頑丈な四輪駆動の車で旦那に送り迎えして貰うからまあ問題ない。仕事も無いが危険も無いでなことになるだろうが。

八時半、風が強くなつて傘が差せないの僅か七百歩の距離をカミさんに車で送つて貰つて医院に駆け込む。果たして二人、何事も無いかの如く出勤している。無人の待合室に白熱灯が輝いて全く普段の通り、ただし患者は居ない。

暴風雨の日曜日、予想した通りの閑古鳥なので溜まっていた雑誌や資料をを片端から読了済みにすべく処理する。

健康診断書を書いてくれ、という大学受験生がびっしり濡れて胸部のX線写真を撮りに来る。彼女の都合で日曜日を予約していたのだから仕方がないけれど気の毒だった。もう一人患者でなく生命保険の加入審査に会社員が来る。これも日曜日が好都合の組。

正午に十分前、来訪二人だけの新記録を樹立して、もう玄関を閉めようかといっているところに、今から行くから待てという浄明寺のナニガシさんからの牽制の電話、二日前捻挫した左の足首がまだ痛いとのこと。欠伸まじりでおはようございますなんていつてるから今起きたところらしいよと電話を受けたヤタバさんが苦笑いする。浄明寺からだとして飛んできても十分やそこいらはかかるのに。でもドアを開けて待っていて良かった。貧血で鉄剤の注射に通っている藤沢の八百屋のおばあさんが息子の車に乗せられて十二時過ぎでからやって来た。本人はいいというのに息子がどうしても行けといつてきかないのだそう。道路がガラガラに空いている状況だから息子には何か魂胆があるのかもかもしれないが、ともかく激しい風雨を衝いてわざわざ藤沢から来てくれた親子を門前払いにして失望させなくてよかった。

結局この十日、日曜日午前の窓口収入九七〇円也。

二日後の十九日の昼過ぎ、自宅に戻るべく一五〇段の階段を登って高台の分譲地に上がった途端に赤トンボの大群に囲まれて驚いた。まだはしりだから、それともそういう種類なのか軀は黄色くくすんでいて唐辛子の様に鮮やかな赤色ではないが、台風一過後の眩しい陽の光に四枚の羽根を輝かせてすぐ目の前、胸の高さでホバリングしている無数の可愛いヘリコプターの挙動はどうみても赤トンボである。なにしろ数が凄い。あたり一面、遙か向うの曲がり角まで一杯になっている。どうしてこの場所に限って群れているのか判らない。つい一週間前まで残暑にうんざりしていたのに、もう秋。

昼食を済ませてまた仕事場のある谷戸に降りようとして同じ場所を通りかかったが、二時間前あんなに沢山浮いていた赤トンボは何故かうんと減って、数える程になっている。

(五時通信 第二三九号 一九九五年九月十日)